

人文情報学としての古典学：その目的・対象・方法

大文字の第二次科学革命の立場から

吉田 民人

日本学術会議 副会長・中央大学 教授

当日要旨

- 個人的な体験：名前，癌告知，寺での聴聞／あるプログラムによる現実構成
- 科学者の説明責任と価値自由：科学者の二つの職業倫理
- 1) 科学と価値 についての 認識科学 によれば，科学は価値まみれ：①科学活動の3つのフェーズと価値，②認識論的価値と実践論的価値
 - 2) 科学と価値 についての 設計科学 によれば，①科学者の説明責任 (accountability) を支える価値関与，② 価値自由 とはなにか，価値拘束 とはなにか
- 古典学研究の説明責任：古典学の現代的役割
- 1) 生物多様性と文化多様性：惑星地球上の二つの情報遺産
 - 2) 人文情報学 古典学はその核 を除く近代科学では扱えない，あるいは乗り越えない意味世界の解明，知の世界における代替不能の役割，すなわち，①価値や幸福や生き方や倫理や人間観や世界観，および②仮構的・虚構的意味世界，を扱う情報科学=プログラム科学
- ことのほか古典学研究に要請される 価値自由
- 1) 近代科学の価値 (論理的整合性と経験的妥当性という顕在的な認識論的価値，および 相對所与性の克服 という潜在的な実践論的価値) から 価値自由 であること
 - 2) 価値の文化的多様性 一般に対する《価値自由》，すなわち，《仮設的 (provisional) な価値関与とその自在な転換》という研究プログラム (ガダマー以降の哲学的解釈学との関連)
- 価値，幸福，生き方，倫理，人間観，世界観などの情報科学=プログラム科学：現代的役割 (1)
- 仮構的・虚構的意味世界の情報科学=プログラム科学：現代的役割 (2)
- 1) 心像的・言語的表象空間の構造：①過去志向と現在志向と未来志向，②経験的・実証的志向と脱経験的・脱実証的志向，③生の諸領域への志向 (対自然志向，対社会志向，對自己志向，對他者志向，対精神志向など)
 - 2) 仮構的・虚構的意味世界の復権：その意義と役割，すなわち 個の実存 との関連
- 情報空間とその二つの認知的評価：現実 (reality) 概念と古典学
- 1) 情報空間それ自体としてのリアリティ：近感覚的・遠感覚的な 身体性情報空間 とマスメディアやインターネット，その他による 装置性情報空間，本来の意味での仮想現実 は 身体性情報空間と一部等価 (三次元の空間性・実時間の相互作用・自己投射性) の装置性情報空間
 - 2) 情報空間とその指示対象との関わりの実証的妥当性 (経験主義的・実証主義的リアリティ)
 - 3) 情報空間とその主体との関わりの実証的妥当性 (脱経験主義的・脱実証主義的リアリティ)
- 人文情報学的な プログラム の二つの事例：比較古典学，一般古典学の可能性
- 1) 自他分節プログラム：①自他分節の3層，②言語情報層の自他分節，③禅仏教の自他分節プログラム：固定常自己 から 脱=無=未自己 へ，ついで 無自己 と 自在仮自

己との往還，固定常分別 脱 = 無 = 未分別 自在仮分別 なる 現実構成の佛教的プログラム の一環

- 2) 幸福プログラム：①現実改変タイプと現実改積タイプ，② 改積 の諸類型（要求水準の下方調整，幸福価値の転換，仮構的・虚構的解釈の導入，物語り の構成），③幸福の宗教的プログラムは 汎用的な幸福プログラムの代表例

- I 以上の議論の基盤をなす 新科学論（大文字の第二次科学革命）の4つの主張：①記号論的 = 設計論的自然観，②情報科学 = プログラム科学，③設計科学 = 自由領域科学，④計算機活用

日本学会議 3 研究連絡委員会共同主催

2001 / 3 / 28 公開シンポジウム：新しい古典学

吉田民人（社会学・社会情報学，中央大学）

古典学にはまったくの素人の身，予め《妄言多謝》，と深くお詫びしておかなければならない。

《妄言》というのは，以下の議論が，古典学の原点または中核，すなわち原資料や原作品の，厳密な考証にもとづく個別的解明をめざす 個別古典学 それ自体にかかわるものではなく 素人の私にできることではない，その成果と蓄積を前提にした，いわば ポスト個別古典学 についての発言であり，まったく外在的なものに留まっているからである。この《妄言》を，古典学に対する大いなる期待のなせる業，とお受けとめいただければ幸いである。

はじめに

近現代の自然科学がもたらした技術や知の偏向のマイナス効果があらわになり，その克服のために，文科系の学問と理科系の学問との接合や融合が問題にされるようになった。すでに 科学 という不動の性格規定を確立している理系の学問にくらべて，文系の学問は，科学とされ，あるいは科学とされず，その性格規定が定まらない。だがこの報告では，文理の接合という問題意識にそって，人文・社会科学，わけても古典学 物理学と古典学は，自然進化の両端を扱う学として知の世界の両極である が 科学 でありうる道を探ることにしたい。物理学の対極にある古典学の 科学 としての成立は，文理接合の一つの試金石である，とする立場がありうると考えるからである。古典学の原点としての 個別古典学 の立場からすれば，文理の接合などは，まったく外在的な問題意識であり，お叱りを受けるのは必定である。だが後述のとおり，この外在的課題が，ひるがえって，比較古典学 や 一般古典学 の必要性と可能性の吟味，あるいは 仮

構的・虚構的表象世界の復権 という内在的課題の所在を照らしだすことになる。

I 伝統的な文系学問論と正統派科学論

現象学や解釈学などの哲学的手法はもとより，精神科学，文化科学，理解科学というすでに一世紀に近い歴史をもつ新カント学派の学問論は，文科系学問の独自性を説得するには有効であるが，文理の接合には向いていない。というよりは逆に，いわゆる 機械論的自然観 に立脚する正統派科学論こそが，文理の接合に向いていないというべきであろう。意味や価値，規則や制度など，要するに 表象や言語が関与する現象を対象にする人文・社会科学は，現行の文理分裂の科学論のもとでは，物質 / エネルギー を対象にする物理・化学や 遺伝情報 を対象にする生命科学とは，とうてい，馴染めそうにない。したがって，期待される文理の接合は，17世紀いらいの正統派科学を支える自然哲学，すなわち 世界の根源的要素は物質 / エネルギー のみであり，世界の秩序原理は法則 のみであると措定する，機械論的自然観 の根本的な変革なしにはありえないだろう。唯物論と法則科学イデオロギー 一元論を修正する，新たな自然哲学の構想が必要である。物的世界と，生物的世界と，人間的世界との科学を，その 連続と非連続 の二つの相で接合しうる新たな科学論がほしい。しかも，機械論的自然観に対抗してきた 有機体論的自然観 や 目的論的自然観 は，すでに敗北したとされている。こうした閉塞状況のもとで登場するのが，この報告の副題にある「大文字の第二次科学革命」なのである。以下，勝手な造語が多く，かつまた十分に説明する余裕もなくて，まことに心苦しいが，しばらくのあいだ，ご海容をお願いしたい。

II 大文字の第二次科学革命

17世紀におけるニュートン力学を端緒とする近代科学の成立は、T.クーン流の個々の科学領域の 複数・小文字の科学革命（物理学革命や生物学革命）とは区別されて、定冠詞つき・単数・大文字の科学革命（A.コイレやH.バタフィールド）と名づけられている。それいらい300年をへて、新たに期待される 大文字の第二次科学革命 は、つぎの4つの提唱に集約することができる。

第1に、大文字の科学革命の流れをくむ正統派科学論は、物理学で成功をおさめた上述の機械論的世界観を、ゲノム科学の還元主義的解釈を拠りどころにして、全自然へと拡張する。けれども、新科学論は、生物的・人間的自然を対象にして、ゲノム科学の非還元主義的解釈にもとづく新たな自然哲学、すなわち 記号論的自然観（Signism）または 設計論的自然観（Designism）を提唱する。それは、ビッグバンに始まる自然進化のプロダクトは、生命の誕生いこう、遺伝情報レベルの たんぱく質と核酸 二元論や高次神経情報レベルのデカルト的物心二元論など、物質/エネルギーと記号情報の二元論的世界でしかありえないと主張する自然哲学である。

自然の原型は物質/エネルギー一元の世界であるが、生物的自然は、その物質/エネルギーを材料にして、遺伝記号ほかのシグナル記号で設計される世界であり、ついで人間的自然は、その物質/エネルギーおよび人間を含む生物、さらには言語ほかのシンボル記号それ自体を材料にして、言語ほかのシンボル記号で設計される世界である。一言でいえば、ポスト生命の世界は 材料 と 設計図 との二元的世界である、と解釈する自然観だといってもよい。

物質/エネルギー（質料）とそのパタン（形相）というアリストテレスの 質料=形相体（シュノロン）からなる原一元論の世界が、生命の誕生とともに、設計される質料=形相体（たんぱく質）と、設計する質料=形相体（核酸）とに二極分化し、それ以後、それぞれの系譜の質料=形相体が進化して、生物的自然と人間的自然という二つの派生的二元論の世界を生みだした。物質/エネルギー（設計される質料=形相体）の一定のパタンが、記号情報（設計する質料=形相体）のパタンによって制御され、その記号情報の一定のパタンが、その反復的複製（遺伝情報の複製や文化情報の教育・伝承）によって保障される。設計図そのものも、すなわち記号情報も、質料=形相体の一種として、物質/エネルギーなしには存立できない。だが、設計図や記号情報の本質は、その材料ではなくて、

そのパタンなのである。エントロピー増大の熱力学第2法則の効果を抑制する、この 二元論の巧み を踏まえて、記号情報のパタンの変容が、つまりは設計の変更が、変異と自然選択・主体選択 に媒介されて実現し、地球上にDNAで設計される 生物多様性 の世界と言語で設計される 文化多様性 の世界とを生み出したのである。

要約すれば、プリ生命の層の一元論的な唯物論的世界が、ポスト生命の層の二元論的な記号論的=設計論的世界へと進化した。エントロピー増大の法則的效果を一部抑止して、遺伝的・文化的な設計とその多様性を保障する、この 二元論のメカニズム ないし 記号と設計機能の自然史的登場 が、新科学論を支える新たな自然哲学の根本テーゼをなしている。本源一元論的派生二元論 ともいうべき自然哲学である。

第2に、この、二元論をめぐる積年の謎に答える新たな自然哲学を背景にしながら、新科学論は、研究対象の 構成要素 の相違に着目して、物質/エネルギー科学に対置される情報科学 を提唱し、研究対象の 秩序原理 の相違に着目して、法則科学に対置されるプログラム科学 を提唱する。物質/エネルギー的世界の秩序原理が法則であり、記号情報的世界の秩序原理がプログラムである。いいかえれば、本源的一元論の世界、すなわち唯物論的自然を扱う科学が物質/エネルギー科学=法則科学であり、派生的二元論の世界、すなわち記号論的設計論的自然を扱う科学が情報科学=プログラム科学である。法則の世界を機械論とせず 唯物論 とするのは、機械 は設計の産物でしかありえないからである。唯物論的自然、すなわち非設計論的世界を機械論的とするのは、いまとなれば形容矛盾でしかない。

生物科学や人文・社会科学における 法則定立 は幻想ではなかったのか、問題は 設計図、プログラム ではないのか、と自問するわけである。正統派科学の物質/エネルギー一元論と法則一元論との終焉であり、修正である。ちなみに、コンピュータ科学は、人文情報学や社会情報学や生物情報学とならぶ計算機情報学として、ここでいう情報科学の基幹部門の一つである。

第3に、新科学論は、対象のあるがままの姿を記述・説明・予測する正統派科学を 認識科学（cognizing science）と限定的に再規定し、すでに実績豊かな理系の工学や文系の政策科学、規範科学など、対象のありたい姿やあるべき姿を計画・説明・評価する、いわば隠れ科学一般を 設計科学（designing science）と命名して公認する。

ディシプリン科学が 認識科学の領域形態 である とすれば、設計科学の領域形態 は自由領域科学(地球環境科学や女性学や安全学) やその究極形態としての人工物システム科学であり、これこそが、inter/multi/trans-disciplinarity の行きつく先であるとする。科学のための科学 に対する 人間と社会のための科学 の宣言であり、ポスト生命の層を特色づける設計機能 それ自体を、とりわけ文系科学において、本格的に科学化しようという提唱である。

第4が、方法や技法としてのコンピュータの徹底的活用である。電子データベース化によるデータ解析や、複雑系の理論に代表される対象の非線形的構造のシミュレーションなどは、その好事例である。すでに科学史家中山 茂は、実験に対して 虚験 なる術語を提案している。

新科学論の提唱は、要するに、自然哲学 としての記号論的=設計論的自然観、対象 としての情報科学=プログラム科学、目的 としての設計科学=自由領域科学、方法 としての計算機活用、の4項目に収斂する。これがそのまま、古典学の 目的・対象・方法 に適用されることになる。

ところで、人文科学のすべての研究対象は、すでに古典学に編入されているか、将来、採択淘汰の結果、古典学に編入されるかもしれないシンボル記号的、とりわけ言語的世界である。その意味では、古典学は人文科学の中核を占めている。人文科学は、新科学論では、人文情報学であり、「人文情報学としての古典学」という本報告の主題は、そこに由来している。この主題に関連するすべての情報現象を一括して、シンボル性情報空間 と表現することにしよう。意味空間や意味世界の別の謂いである。

Ⅲ 人文・社会科学と理系科学との接合

さて、従来の文系学問論も正統派科学論も、文理の接合には不向きであるといったが、シンボル記号情報を扱う情報科学=プログラム科学 という新科学論の提案は、生物科学、すなわちシグナル性の情報科学=プログラム科学、および 物理科学、すなわち物質/エネルギー科学=法則科学 と接合可能で、かつまたそれらと対抗的・相補的な人文・社会科学、という文理融合にふさわしい科学論を目指している。

物的自然も、生物的自然も、人間的自然も、すべて物質/エネルギーなしには存立できないが、問題は、第1に、設計の有無、第2に、設計に使用される記号コードの相違である。それゆえ、新科学論は、まず言語現象を生物科学に接合するために、biosemiotics(生

命記号論、生物記号論)や生物的・人間的自然に固有の 記号情報 または 記号パターン一般 なる新概念を、ついで、その記号現象を物理科学に接合するために、全自然に遍在する 非記号情報 または 物質/エネルギーのパターン一般 なる新概念を、それぞれ導入しなければならない。

換言すれば、遺伝記号すなわちRNA・DNAを、ホルモンやフェロモンやリリーサー、感覚・運動信号、そして表象やアイコンや言語へと進化する記号現象の元型(prototype)と把握する 記号進化論 (evolutionary semiotics、人文・社会科学と生物科学との接合)は、物質/エネルギーのパターン一般という 非記号情報、すなわち最広義の情報概念 (人文・社会・生物科学と物理科学との接合)とともに、新科学論の要をなしている。

DNA や感覚・運動信号などは、記号とその指示対象とが物理科学的に結合して、かならず指示対象をもつが、意味表象をもたない記号形態と定義される シグナル (signal)であり、アイコンや言語などは、記号表象と意味表象とが、学習の結果、脳内で物理科学的に結合して、かならず意味表象をもつが、指示対象をもつとはかぎらず、もつとしても意味表象を媒介にしてしか指示対象と結合しない記号形態と定義される シンボル (symbol)である。なお、表象 自体は、原シンボル ないし 1項シンボル と規定されている。記号解読一般は、人間の世界に独自のことでない。ゲノム科学の主要な課題は、DNA 記号の解読なのである。

こうして新科学論の立場からすれば、全自然は物質/エネルギーを共通の基盤とするが、物的世界と生物的世界との種差は、後者の設計に必要な遺伝記号ほかのシグナル記号コードの有無であり、生物的世界と人間の世界との種差は、やはり後者の設計に必要な言語ほかのシンボル記号コードの有無である、ということになる。物質/エネルギーという材料面での連続性と 記号コードという設計面での非連続性 が、物理科学と生物科学と人文・社会科学とを相互に接合可能で、かつ相互に対抗的・相補的な科学として成立させるのである。この進化的な知見は、文系・理系の研究者が、その相互理解のために等しく共有すべきものである。文理の接合とは、一つには、そうした 知の全体像 の確立を意味している。以上の議論は、科学 にとって、それを支える 自然哲学 がいかに重要であるかを、如実に示している。

IV 生物多様性(かつての博物誌)と文化多様性(古典学)

ところで、ふたたび新科学論をもちだすなら、生物多様性 (biodiversity) は DNA 情報を中核とするシグナル性情報資源の蓄積であり、文化多様性 (cultural diversity) は言語情報を中核とするシンボル性情報資源の蓄積である。これら二つは、宇宙進化のように、法則的作用の結果として、いわば自動的・受動的に与えられるものではなく、反復される変異と自然選択・主体選択、すなわち反復される試行錯誤の成果として獲得される、地球上の巨大で貴重な二つの情報遺産である。かつての博物誌は生物多様性に、そして古典学は文化多様性に、それぞれ深くかかわっている。

かつての博物誌は、分子生物学の登場とその核となるゲノム科学のめざましい発展によって一変することになった。科学は個別化と一般化の往復を特徴とする知の営みであるが、博物誌は、DNA 記号によって書かれた生物の多様な遺伝的プログラム、すなわち生物多様性の、相互にフィードバックしあう個別研究、比較研究、一般研究として再構築されるのである。

古典学もまた、個別古典学の成果と蓄積を踏まえて、比較古典学と一般古典学の可能性を模索・追究するべきではないのか。もちろん、生物多様性を担う記号コードが RNA/DNA コードとして、少なくとも地球上では単一であるのにくらべ、文化多様性を担う記号コード、すなわち言語コードは、系統論を考慮しても、なお空間的・時間的に多元的である。それゆえ、多少とも情報変容をともなう翻訳なしには比較も一般化も不可能である。この言語コードの多元性が、比較古典学と一般古典学を躊躇させる要因の一つでもあろう。だが、この比較と一般化は、人類の、というよりこの惑星地球上の、文化的情報遺産の全体像を解明するためには、それが相当の長期戦略と異文化にわたる共同研究によってしか実現されないにせよ、ぜひとも必要な学問的挑戦ではなからうか。

個別古典学と比較古典学と一般古典学は、相互に浸透して、相互を豊かにする。これら3つの研究プログラムを等価に評価する人文情報学としての古典学が成就することを願ってやまない。

V 比較古典学と一般古典学のための理論言語

比較古典学や一般古典学という情報圧縮

理系における方程式は情報圧縮の事例のためには、言語や文化、時代や地域、等々を異にする多様な資料や作品を横断しうる共通の枠組みがなけ

ればならない。その第一歩として、それぞれの対象ないし当事者の資料言語を変換しうる研究者コミュニティの理論言語、すなわち比較古典学・一般古典学のための科学的構成概念の共同構築が必要になる。認知情報と認知プログラム、評価情報と評価プログラム、指令情報(意思や命令)と指令プログラム、などはその例であるが、ここでは、プログラムという科学的コンストラクトを取り上げてみたい。

プログラムは、前述のとおり、法則に対置される秩序原理として構想されたカテゴリーである。一定の情報空間の構造やそれを生み出すプロセスを規定した記号情報であり、生物的世界の設計図であるシグナル性プログラム(遺伝的プログラムほか)と人間的世界の設計図であるシンボル性プログラムとに大別することができる。シンボル記号で担われるプログラムは、社会情報学なら、倫理や法、慣習や制度、マナー、等々であり、人文情報学なら、手法や技法、方法や手順、等々である。たとえば作品を生み出す個別的・一般的なプログラムこそが、物質/エネルギー空間の法則に匹敵する、情報空間の秩序原理であることを改めて力説したい。人文科学においても社会科学においても、法則の存在に懐疑的な論者は少なくない。問題はむしろ、法則に替わりうる秩序原理を指定できるかどうか、もし指定できるとすれば、それは何か、ということだったのである。プログラム概念は、その一つの回(解)答にほかならない。

1) プログラムそれ自体(genotype)の解明、2) プログラムの作動過程の解明、3) プログラムの作動結果(phenotype)の解明、4) プログラムの生成・維持・変容・消滅、すなわちそのライフサイクルの解明の4つが、シグナル性・シンボル性の別なく、すべてのプログラム科学の共通テーマである。法則科学のテーマとの相違は明白であろう。文法のような無自覚的プログラムもあれば、押韻のような自覚的プログラムもある。計算機プログラムのように明確で確定的なものもあれば、執筆プログラムのように曖昧で不確定部分の多いものもある。これらはすべて、プログラムそれ自体の解明の事例である。なかでも各種のプログラムの個別性と特殊性と一般性の解明は、比較古典学や一般古典学の最大のテーマの一つである。

一つの具体的事例を用いて考えてみよう。自他分節がもたらす自己現象は、遺伝情報レベルの第1水準(免疫反応、物質的自己)、感覚運動情報レベルの第2水準(身体図式、現象学的自己)、言語情報レベルの第3水準(自己包絡、文化的・制度的自己)と三層化されている。

いずれも一定の 自他分節プログラム の作動の結果であると捉えることができる。第3水準、すなわち言語情報レベルの自己現象は、個人主義や人間主義など、各種の 自他分節の文化的プログラム に依存してヴァリエーションが多いが、なかでも 禅仏教の自他分節プログラム は、ひととき異彩を放っている。

それはまず、第1に、個人主義や人間主義など、それぞれの民族文化的な自他分節プログラムで形成される 自然生成的・固定的な自他分節の相、第2に、脱自他分節、すなわち 無自他分節、すなわち 未自他分節、つまり 脱=無=未自他分節の相、第3に、自在で仮設的 (provisional) な自他分節の相、という自他分節の3つの相を分け、ついで、第1相から第2相への転換、そして最終的には、第2相と第3相とのあいだの還相・往相の絶えざる相互転換、を規定するプログラムである。自他分節の、まことに巧みでしなやかなコントロールである。遺伝的に規定された生理学的な快・不快はともかく、文化的に規定された価値関与的な快・不快は、第3水準、すなわち言語情報レベルの 自己意識と不可分であり、第2相の 無自己 と第3相の 自在仮自己 との往還が、禅仏教の、後述する 汎用的幸福プログラム の要諦をなしている。

自他分節プログラム という理論言語が、仏教とキリスト教、あるいは人間主義と個人主義に固有の自己現象を、相互に比較可能なものにしうるのである。比較古典学 の一例ではなからうか。

Ⅵ 古典学の現代的役割

古典学の対象となる文化多様性は、生物多様性と同様、状況激動に対処するための、いわば 多様性による保険 として、それ自体の価値をもっている。だが、それを前提にした上でなお、古典学の意味空間は、人文情報学を除く近代科学によって代替しうる領域と代替しえない領域とを分かちることができる。この人文情報学を除く近代科学では代替しえない、あるいは乗り越えられない領域こそが、人文情報学としての古典学の現代的役割として、新しい古典学の対社会的な死命を制することになるのではなからうか。ここでは、二つの領域を考えてみたい。一つは、価値論や幸福論や倫理にかかわる意味空間であり、いま一つは、仏や浄土や輪廻、神や天国や三位一体、そして各種の非宗教的、あるいは文学的な仮構的・虚構の意味空間など、指示対象の有無存否を問う必要のない、また問うべきではないような情報空間、すなわち 純シンボル性情報空間 あるいは価値中立的に 純構築的表象空

間 と表現してもよい。

まず、価値問題に関する古典学の現代的課題は、価値命題の普遍的妥当性は論証も実証もできないとするメタ倫理学・メタ価値論の成果を前提にしつつ、第1に、古典に登場する個々の評価情報・評価プログラムを、文献的コンテクストや歴史的・文化的・社会的・個人的な状況要因との確に関連させることによって解明・理解し、その上で相互に比較、また一般化するという認識科学的課題である。第2に、その成果を活用して、価値選択の、とりわけ合理的根拠 という、現代社会が要請する喫緊の設計科学的課題に挑戦することである。個人的な幸福論と社会的な (公正や正義を含む) 福祉論、すなわち二つの well-being 論は、認識科学的にも設計科学的にも、その一つの集約形態であると思われる。たとえば、いかなる価値を幸福の基盤にするか、についての 比較古典学 的研究が、人類の幸福価値の構造ないし全体像を明らかにできれば、現代社会における幸福価値の偏向を照射して、一つの大きな貢献であろう。

ついで、仮構的・虚構の意味空間、すなわち 純シンボル性情報空間 に関する古典学の課題は、第1に、言語の本質は、ソシユールの指摘のとおり、記号表象と意味表象との脳内結合であり、その2項的な表象結合が、指示対象をもつべきかどうか (経験主義)、もつとして真偽や適切性を問題にするべきかどうか (広義の実証主義)、等々は、言語使用のイデオロギーに属する すなわち、人間の1項的 (心像的)・2項的 (言語的) な表象空間は、それ自体で自立かつ自律的でありうる という原認識を確立することであろう。第2に、豊かな表象機能、とりわけ仮構的・虚構的な表象機能は、発達した言語と同様、まずもって価値中立的に、他の生物にない人間独自の 能力と捉えられなければならない。ここで 表象 とは、心像的 (1項的)・言語的 (2項的) な記憶表象・想像表象をすべて包括している。第3に、その1項的・2項的な表象空間の具体的内容は、歴史的・文化的・社会的・個人的な状況的要因によって決定されるが、物質/エネルギー科学=法則科学をモデルとする正統派科学論が、近代主義的イデオロギーと一体になって、人間の表象空間に経験主義的・実証主義的・合理主義的な偏りをもたらしたという事実を確認することであろう。宗教的情報空間の排除は、その典型例である。こうして第4に、古典学は、脱経験主義的・脱実証主義的な仮構的・虚構の意味空間の、人間にとっての機能や意義をどのように把握し、どのように位置づけるか、という根本問題に答えなければならない。

一定の原典に描かれた仮構的・虚構的世界についての研究が、実証的であるべきことは科学として当然である。だが、その研究プログラムにおける実証主義が、対象それ自体の仮構的・虚構的意味空間の否定的評価を、自覚的にせよ無自覚的にせよ、もたらす可能性が、かりにもありうるとすれば、十二分に自戒しなければならぬ。そのためにも、純シンボル性情報空間の意義や機能の、理論的・経験的・実証的解明が必要になる。前近代科学的な自然学は、自然科学によって乗り越えられたとされるが、その乗り越えは、経験主義的・実証主義的な価値観に立ってのことであり、前近代科学的な自然学が全否定されたわけではない。たとえば、その、死の克服をはじめとする各種の癒しの機能までが否定されたわけではない。

幸福プログラムは、生の現実それ自体を変える現実改変タイプと、生の現実の受けとめ方を変える現実改釈タイプとに分けることができる。後者は、要求水準の下方調整（上を見ればきりがいいから下を見よ）や幸福価値の転換（価値転倒など）とならんで、しばしば仮構的・虚構的な意味空間を活用する。これらの主張自体は、すでに一般古典学に属するものではないのか。幸福の宗教的プログラムは、いかに過酷な生の現実にあっても常に幸福、または非不幸を保証する、いわば汎用的な幸福プログラムである。佛教の無常観は、いかなる生の現実にも適用可能な、要求水準の下方調整の一例であり、来世の幸福は、仮構的・虚構的な意味空間の活用である。いずれにせよ、幸福の汎用プログラムを可能にするメカニズムの解明は、各種の幸福価値の解明とともに、幸福論の一つの要点をなしている。

個別古典学の世界は、豊富な事例に満ちて、まさに、そのための宝庫ではないのか。

古典学の現代的役割という観点から、最後に、古典学とこころの問題との関連にふれておきたい。こころの教育やこころの豊かさは、現代日本が抱える緊要の課題である。だが、こころの教育という文脈で使用されるこころとは何か、について明確な科学的解答があったとは思われない。人文情報学はこころを、端的に心像的・言語的表象空間と捉え、こころの教育で現在とくに問題にされるのは、上述した合理主義的・実証主義的偏向によって貧しくされた表象空間、とりわけ貧弱な対人的表象空間と、人生および世界に確かな意味を与える、しばしば脱実証主義的な仮構的・虚構的表象空間の衰弱ではないのか、と自問する。ゲームほかの仮想現実を、いかにして豊かな表象空間の自発的・自律的な形成・享受へと導

くかは重要な課題である。古典学はこの種の意味世界に満ち満ちている。

おわりに

以上、現在の主流ともいえるべき個別古典学にとつては、まことに迂遠で外在的な《妄言》に終始したが、要するに、人文情報学の、したがってまた古典学の現代的目的は、設計科学的な価値論・幸福論・福祉論、あるいは仮構的・虚構的な意味世界の復権などであり、その対象は、個別古典学、比較古典学、一般古典学、そして、その方法は、個別古典学はもとより、比較古典学や一般古典学のための、電子データベース化の全面的活用である。これを換言すれば、古典学は物質/エネルギーと法則一元論の旧科学がもたらした近代知の歪みを、まさしく新科学の名において、すなわち記号情報とプログラム立場から是正する、という大きな歴史的・文化的・社会的使命を帯びている。この報告の副題に「大文字の第二次科学革命の立場から」と銘打った所以である。

新科学論 についての関連文献

- 1) 拙稿 『自己組織性の情報科学 エヴォルーションストのウィーナー的自然観』新曜社、1990年
- 2) 同上 「ポスト分子生物学の社会科学 法則定立科学からプログラム解明科学へ」『社会学評論』46巻3号、日本社会学会、1995年
- 3) 同上 「近代科学のパラダイム・シフト 進化史的情報 概念の構築と プログラム 科学の提唱」『平成8年度・学術研究総合調査報告書』日本学術会議、1997年
- 4) 同上 「21世紀の科学 大文字の第2次科学革命」『組織科学』32巻3号（特集「プログラム科学 社会科学に 法則 はあるか」）白桃書房、1999年
- 5) 同上 「近代科学の情報論的転回 大文字の第2次科学革命」『紀要』社会学科10号、中央大学文学部、2000年
- 6) 同上 「俯瞰型研究の対象と方法： 大文字の第二次科学革命 の立場から」『学術の動向』5巻11号、編集協力/日本学術会議、2000年
- 7) 同上 「21世紀科学の再編と社会学」『学術月報』54巻1号、日本学術振興会、2001年